



三養雜記

三

增5  
120  
3



曾門  
號 120  
卷 3



養雜記卷三目錄

塙檢校小傳

龜のさう擲 孤矢

我子と伴と云

龍鬚

常元蟲

水虎

萬葉集夫木鈔

餘一

岐神

仁和寺書目

鍾馗子蝙蝠比圖

角兵衛獅子

人角

平家蟹島村蟹武文蟹

燂酒

阿伽の水

和歌子て狐狸を伏

手遊

兩部唯一の神道

鳥居

長坐する時の心得

虎の畫法

藤豆 鈴蟲松蟲

門がく

大田道灌の和歌

めぐるり

俳諧百韻此始

木牛

楠家菊水此紋

東呉といふ銘の手水鉢

樊噲門破の辨

畫家の用意

硯此面は文字をうぬ

開帳

浅草寺此繪馬

茶おけ

免了や次

三國一の醜

三養雜記卷三

塙檢校小傳

塙檢校名ハ保己一武藏秩父郡保己村の産あり、その母、  
原宗固此門子入て詠歌和學小心をひそめ、皇朝の古書と  
集りて學校を興さんと志ありて、遂に和學講談所を  
建て學生を教授す、藏中此書二萬餘卷不及了、名山古  
刹子藏するところ、異書を搜りて免流布の書とて、異本  
あれは、こまを収校刊一名て羣書類従とよふ、その書六百六  
十餘卷、その切三十九年をつとて集成す、その後生、その賜  
を受、亦少く、猶且續集千餘卷、此奇書ありたり

目錄ハ己小印行して世子布里吾邦古來より大部の書あり、  
といふもその右よりつづきのものありとれ予らうくおのふ三國  
志魏の應劭傳子五經君羊書以類相從といふとありよりて  
名づけられともあふらん、その著すところの書、

椒庭譜畧 皇親譜畧 螢蠅抄 花咲松

抜刻すところのハ日本後紀令義解百練抄類聚符宣抄徒  
然草等數部あり、常に誦ずるところに和歌をあつめ名づ  
けて總隱集といふ、あゝ人その書名をどうとあり、檢校  
らひく云深き意あり、あゝ人總檢校の隱居此集といふと  
ありといわれたりとそ又ある時々方あゝ水無月のころ暮

みして源氏物語を講説せられるより、ひとまきりの涼風吹  
き、あゝやあゝや、うさささ小侍一人の先生あゝ待たまといひ  
ハ檢校ハ犬の消たるとあゝされハ何故とととれらる、こゝりハ  
の消てハハ火そのひまで待たまといと答らる、檢校のうさささ  
て目のあゝさゝハ不自由あゝものうれと戯れられらる、かゝる滑  
稽もまゝあり、さゝや一號を水母子ととり、こゝハ水母鯨の目を  
借といふ諺より出たり、水母ハ鯨為目といふとハ越絶書廣韻  
抄ハハ楞嚴經あり、あゝ林下偶談農田餘話小ハ説をん  
里、まゝ五月五日ハ檢校の誕生日あゝ或人云五月五日ハ生る  
子ハ親ハたゝといふ、昔よりいふ傳れと檢校の家を興

子孫のさへくもく古來の俗説をやぶる不足なりと云り因（三）  
云五月五日生子を忌と史記子孟嘗君以五月五日生云五  
月子者長與戸齊將不利其父母とあり索隱子風俗通  
云俗説五月五日生子男害父女害母也と云り大鏡  
裏書子も云え壺囊鈔も云えたれハ吾邦少くもやまふ  
らりくと云えり文政四年九月十二日子卒行年七十六歳  
里檢校あり史學子精細世その比を足す予うあきくき  
り語子淺州子山岡明阿の門人なり片山足水とのふ人あり  
今山岡明阿の手澤此遺書をその家子つと云り足水うり  
宸翰の御願文一葉を藏せり太上天皇とのとありて御華

押たりあられぶづれの帝も定めて年ごろあり御書も  
うらまへくまへおせば後子ハ墨本として人にも贈られハ予も一  
本を藏せり誰れも考えたりとありと或時輪池翁の席上  
子てのこれりしづめの宸翰はていひ出た子塙檢校もその坐  
小ありていこれらるる御文體子と云えり幸子翁の  
坐右子宸翰の摹本ありと云りてとあより讀りてやく  
子や半むろり子廷禁之闕宸居無動姑射之山萬壽不  
騫と云り文子つりて檢校もて手をあ含笑して日ろりた  
りとのみにもり坐中の人いり子とつらふされハよこハ華園  
帝の宸翰ありそのよハ華園院の仙洞にておそくませり時

伏見院猶いまだ仙洞子てありませハ伏見院を姑射と稱し當  
今を延禁之闕とハあるたまたせたるれりことともあけは辨  
しられりともや數年人々の考へ得ざりしをうくとこそよき  
まつきたるを此ひとりあくも強記博聞抄ひやうと輪  
池翁のちありれりき、

仁和寺書目

仁和寺書目仁和寺書籍目録といふものありこれを仁和寺  
の藏書目録と思ふ人もあれとさきあり永享中將軍家の命を  
ふけて外史中原氏の奉る本朝の書目ありその書目の仁和寺  
宮北文庫子存本をよむ世に隔つてきたりありされハ本書

奥書子以仁和寺宮本書之普光院被尋之時注文とあり

龜のさし掛

新撰六帖に光俊の龜乃歌あり

河の瀬ふるきたる龜のさし掛を見せむのあはれりき  
と見えりこの龜のさし掛を今の龜甲に掛のさし掛人  
もあるのあれとさきハあるこれハ披神記に見えり漢靈帝  
の時江夏黄氏の母に盤中の水子浴して龜化て深淵に  
入りてその後をり水の面より銀鏡ハあるその首あり  
このつをわたり銀を掛ふりれりてよきとてあつてあつても  
て龜甲の掛に證とすハ誤ありとすハさきあり黄氏の

母の故事ことありければ歌の意こころまことん

狐矢きつや

新撰六帖の知家の矢や此歌このうた

人ひとこころ頼たのぐとき狐矢きつやはたゞそのありままごとく地ちをせぬ

この狐矢きつやとてはるる矢やのよけり源平盛衰記不武者ふむしやをハ

え射いすされハ狐矢きつやこそわれといふも本意ほんいあらねハ只射ただいよ

といふもの多おほくとあるまありて世より吾邦わがくにの俗しやくも意外いがい不出いて

測ちかべううざる事を狐きつも天狗てんぐも神かみももつる唐山たうざんにて鬼

をどをつるあかしく陸奥國りくおのくににて山市さんしと狐館きつたて越中えちゅうにて狐きつ森のもりと

云ハ海市うみを經ま託たつ子こ乾達婆城けんたつばじやうといふ子こありあり雷らい斧ふ石せきの

漢名かんめい霹靂へきれき和名わなまのねのまさう又またてんぐのまさう山慈姑さんじこの

異名い鬼燈きとう繁和名ままのねれうれうとてあつとをあつと切き之の猶なほ

いそ天狗てんぐの礫つら天狗てんぐ倒俗たうたふくも天狗てんぐ俳諧はいかい天狗てんぐ頼子らいこをどの名目なも

とて同意どういして行方やまがたの志しとて天狗てんぐ子こさらられられれとも神かみがううとも

とて易子えきこ陰陽不測いんやうふそく之謂をい神孟子せいしん子こ聖而不可知せいじゆん之謂をい神と

とて鬼きといふも鬼神きしんの謂をいありまま史し子こ天狗てんぐ星せいありりとて人意おんい子

測ちかべううざるの義ぎありり、

鐘かね植うゑ子こ蝙蝠ひょうぶを畫かくく圖ず

鐘かね植うゑいいゆゆと玄宗げんざうの夢ゆめとてその事こと唐逸史たういつし子こ見みええるる今いま和

漢かんとてその圖ずををつつて辟邪へきじやの神しんとす世よ子こ鐘かね植うゑの像さうれら

ちりふ蝙蝠へんくわを多おほくくものおほくのおほくあり何いかんかおほくひひして多おほくくといふ  
 ともを疑うたがふのおほくれおほくかおほくまおほく子おほくわおほくんおほく予よろろくおほく押おほくりおほくへおほく子おほく鐘おほく植おほくハ辟おほく邪おほくのおほく神おほく蝠おほく  
 蝠おほくを多おほくくハ迎おほく福おほくのおほく意おほく子おほくて辟おほく邪おほく迎おほく福おほくのおほく圖おほくありん蝙蝠おほくのおほく蝠おほくを音おほく  
 通おほくわおほくく福おほく字おほく子おほく入おほくて蝙蝠おほく子おほく魂おほくを畫おほくきて福おほく祿おほくのおほく圖おほくとすおほくり如おほく  
 きおほくか慶おほく祝おほくのおほく意おほくを寓おほくすおほくこととおほくおおほくひおほくあおほくらおほくくおほく子おほく新おほく渡おほくの大おほく錢おほく  
 子おほく錢おほく面おほく子おほく驅おほく邪おほく降おほく福おほくのおほく字おほくありてその背おほく子おほく鐘おほく植おほく子おほく蝙蝠おほくのおほく圖おほくあり  
 且おほく予おほくが意おほく子おほく暗おほく合おほくせりおほくよりてその頂おほく馬おほく山おほく翁おほく子おほく乞おほくく吳おほく小おほく僂おほくら  
 圖おほくを縮おほく寫おほくし概おほく畧おほくを併おほく多おほくく新おほく禮おほくハ贈おほくりおほくのおほくとせしとあり  
 我おほく子おほくを稱おほくして悴おほくといふ  
 せられといふ詞おほくハ瘦おほく枯おほくレ畧おほく語おほく子おほくてかおほく人おほくを卑おほくめおほくのおほく詞おほく

ありその證おほくハ室おほく町おほく殿おほく日記おほく子おほく主おほく君おほく子おほくを多おほくれおほくまおほくあおほくらおほくせおほくてす  
 小おほく渴おほく命おほくを失おほくひ乞おほく食おほく同おほく前おほくのおほくせおほくられおほくともといひまおほく武おほく邊おほく吐おほく子おほくも  
 丹おほく後おほく守おほく大おほくのおほく眼おほくをおほく入おほくりおほくて推おほく參おほくありおほくせおほくられおほくめおほくとおほく詞おほくておほくせおほくけおほくと  
 ありおほくあおほくらおほくるおほく今おほくハ貴おほく賤おほくとおほく子おほく我おほく子おほくを稱おほくすおほく詞おほくとありおほくか  
 謙おほく辭おほくありおほく倭おほく爾おほく雅おほく子おほく悴おほく俗おほく作おほく悴おほく今おほく倭おほく俗おほく稱おほく我おほく子おほく曰おほく悴おほく蓋おほく謂おほく  
 悴おほく者おほく之おほく意おほく猶おほく中おほく華おほく稱おほく我おほく女おほく謂おほく蕉おほく萃おほくとおほくらおほくやおほくつおほくられおほくといふ  
 も倭おほく名おほく類おほく聚おほく鈔おほく子おほく奴おほく僕おほく和おほく名おほく夜おほく豆おほく加おほく礼おほくとありおほく日本おほく書おほく紀おほく通  
 證おほく子おほく吾おほく憔悴おほく枯おほく槁おほく之おほく義おほく謙おほく辭おほく也おほくとおほくらおほくくおほくれおほくこれおほくもおほくといふ  
 奴おほく僕おほくのおほく稱おほくありおほく今おほく自おほく稱おほくして僕おほくとおほくせおほくられおほくともいふハ我おほく子おほくを  
 せられといふ子おほく同おほくいふ



角兵衛獅子

越後國よりいつ獅子舞あり、世に越後獅子といひ、まは角兵衛獅子ともいふ、角兵衛の名その故を考ふるに、或云武藏國氷川神社に古獅子頭あり、それありの村にあり獅子舞をすまふ、ハハの獅子頭をうけて舞ふ、蓋田樂の遺風をいふ、その獅子頭の角は菊の御紋ありて、御免天下に角兵衛作之と彫てありと云ふ、れは角兵衛ハ古代に獅子頭の名をいふ、さういふ今、角兵衛獅子の詞、ちやうど小桶でめてこひすつてんてれつ、庄助さんあんどんくわいも幸もねへあつた、何のこけもこらぬ、は定めつ、さき詞をつゝえたる、あづこ、の銘

ある天下といふ號ハ天の下にあり、はなきよりの意、あづこ音ハ器物も食物も肩あせるといふ、信長記に天下といふの藝者、をそる人といふ、さういふ、さういふ、その後、や、かく天下に號を、其、たまや、まけ、ハハの獅子頭ハその、これ作、て、あ、あ、今、その號を改、え、の、ハ、鏡の銘、の、と、い、ふ、の、

龍鬚

疊を龍鬚といふ、龍鬚の誤り、その、帝を造、る、州を龍鬚、と、い、ふ、その、州、生、茂、た、る、龍の鬚、似、て、肩、や、名、あり、晋東宮舊事、太子有、獨坐、龍鬚之、席、國清百録、龍

鬚席一領唐書地理志小鳳翔府土貢榛實龍鬚席子と  
多く見えてこれハその誤ハクハ辨すも及ばずれと吾邦子  
そのあやまり來たるも亦あり雅亮裴東抄子つまづびんを  
二枚志きて寛治二年記子龍鬚筵青地錦縁とありとあり  
と申已子遊仙窟子龍鬚席子作たる注子燈心とあれハ  
蘭草ありと考へて因云鬚と鬚ハ字形もあはれハあや  
まりやすきと吾邦のこゝろあはれ因話録子下輩不通義  
理者使之馮文字甚誤云或多誤著獎獎合鬚鬚合  
著賓鬚鬚合著とつらつれハゾクも點畫の似たる文  
字ハ誤ると多くと見えてつら

人角

文化庚午の藥品會不人角いぞうそハ薩摩あり伊作地  
士黒川某此額子一角を生じたり年八十七歳元禄三年庚  
午夏五月十四日終とありとありと人ともめづつと  
子いあり、案ずると人角ハ和漢とも子往り所見あり、そのとめ  
つらつらつらつらつ日本紀畧寛平九年七月廿三日陸奥國  
言安積郡所産小兒額生一角まゝ新著聞集子額ふ  
角二本あり子と産たるとあり又北窓瑣談子寛政四  
年辛亥備後國蘆田郡常村の農夫八十餘歳あり額子  
一角を生じ翌年正月十七日解脫と見え簞曝雜記子梁

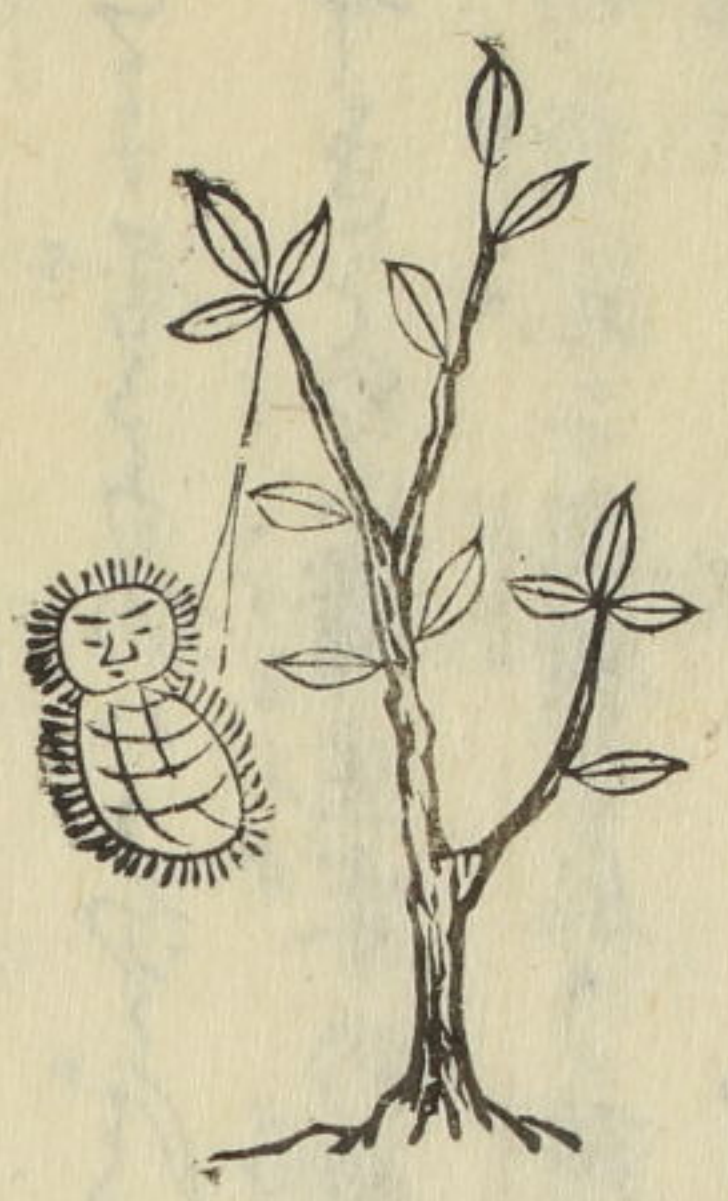
武帝時鐘離人顧思遠年一百十二歲蕭侯見其頭  
有肉角長寸許觀侯余亦曾見二人一江蘭阜陽湖  
人一徐姓嘉興人頭上皆有肉角高寸許年亦皆九  
十餘蓋壽相也然二人皆貧苦無子則亦非吉徵と  
いふ、これハ人角ハ小兒と老人とハあつても、  
日本書紀垂仁紀額角人乘一船泊于越國等飯  
浦をたあふ、一、角もさあぬて古人の説もあはるゝ  
實ハいふそや、

常元蟲

近江國志賀郡別保とふ里小西念寺とて淨院あり寺

境の乾四至四町さう此人家の壠ありて住人ありたあ  
こ子居るものハあつてその身子禍ありとや俗に常元  
やきとのふ蒲生家の侍南蛇井源太左衛門とのふとの天正  
の兵亂子無頼とれり強盜して諸州に横行せりその徒數  
百人ありて害とあす年老て別保子之りあ不悪行を怨  
みせり人の勸ふありて薙髮して常元と稱す慶長五年  
諸國の姦賊を尋召捕られしころ幾年の悪行せり罪人お  
まはとてその宅に柿木子縛せり諸人のえらりし終  
不斬れたり死子のぞきてさく悪言を吐き更子人の憎を  
さけし梟首せられ骸ハ村の庄屋藤子下されり柿の木にも

虫を埋<sup>う</sup>ま<sup>る</sup>るが數日<sup>かずじつ</sup>の後墳上<sup>のちつらの上</sup>にありき蟲<sup>ちゅう</sup>多く生<sup>あ</sup>ぜり形<sup>かたち</sup>ハ  
 人を縛<sup>ば</sup>りたるごとく後蝶<sup>のちてふ</sup>子<sup>こ</sup>化<sup>あ</sup>て去<sup>さ</sup>りしその殼木<sup>かき</sup>子<sup>こ</sup>のこれ  
 と毎年<sup>まいねん</sup>あり人<sup>ひと</sup>これを常元<sup>じょうげん</sup>蟲<sup>ちゅう</sup>とのふ江戸<sup>えど</sup>子<sup>こ</sup>もきこえ享保<sup>きやうほ</sup>癸  
 卯<sup>みづのえ</sup>の夏<sup>なつ</sup>に蟲<sup>ちゅう</sup>を江戸<sup>えど</sup>の人<sup>ひと</sup>もきこめづるものよし、  
 面目<sup>めんめく</sup>口臭<sup>くちう</sup>備<sup>そま</sup>り口の味<sup>あじ</sup>をてて黄色<sup>きせき</sup>あり手<sup>て</sup>ハうろへま<sup>ま</sup>り縛<sup>ば</sup>りし如<sup>ごと</sup>く、  
 足<sup>あし</sup>ハ縮<sup>ちぢ</sup>たるごとく段<sup>だん</sup>ふ衣<sup>ひ</sup>續<sup>つ</sup>あり、  
 蠟<sup>ろう</sup>子<sup>こ</sup>化<sup>あ</sup>すりときハ黒<sup>くろ</sup>絲<sup>いと</sup>を吐<sup>つ</sup>首<sup>くび</sup>あり  
 下<sup>した</sup>手<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>を繫<sup>ひ</sup>縛<sup>ば</sup>り柿<sup>かき</sup>樹<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>粘<sup>ねん</sup>り  
 中<sup>ちゆう</sup>子<sup>こ</sup>くらのもの似<sup>に</sup>たり、背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>脱<sup>だつ</sup>  
 穴<sup>あな</sup>ありと鹽<sup>しほ</sup>尻<sup>しつ</sup>子<sup>こ</sup>をえたり、



此<sup>こ</sup>の蟲<sup>ちゅう</sup>を物<sup>もの</sup>産<sup>さん</sup>家<sup>か</sup>にたすし爾<sup>に</sup>雅<sup>みやび</sup>子<sup>こ</sup>出<sup>で</sup>たる猛<sup>もう</sup>女<sup>にょ</sup>とのふ蟲<sup>ちゅう</sup>子<sup>こ</sup>て、  
 邦<sup>くに</sup>俗<sup>ぞく</sup>ハおきく蟲<sup>ちゅう</sup>とのふものよし、おりのよの常元<sup>じょうげん</sup>が墳上<sup>つらの上</sup>の樹<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>  
 たあしき蟲<sup>ちゅう</sup>化<sup>あ</sup>生<sup>あ</sup>りたるも、萬<sup>ばん</sup>然<sup>ぜん</sup>あれど自<sup>おの</sup>罪<sup>つみ</sup>業<sup>わざ</sup>化<sup>あ</sup>報<sup>はら</sup>ふよ  
 きて彼<sup>かれ</sup>ら名<sup>な</sup>を蟲<sup>ちゅう</sup>子<sup>こ</sup>まで肩<sup>かた</sup>せて常元<sup>じょうげん</sup>が惡<sup>あく</sup>事<sup>こと</sup>のひつてて話<sup>はな</sup>柄<sup>がら</sup>  
 とすも因果<sup>いんぐわい</sup>のとりつらおきこべし、

平家<sup>へいけ</sup>蟹<sup>がま</sup>、島<sup>しま</sup>村<sup>むら</sup>蟹<sup>がま</sup>、武<sup>たけ</sup>文<sup>ぶん</sup>蟹<sup>がま</sup>

讀<sup>よ</sup>政<sup>せい</sup>國<sup>くに</sup>八<sup>はち</sup>島<sup>しま</sup>の海<sup>うみ</sup>濱<sup>ひら</sup>子<sup>こ</sup>鬼<sup>おに</sup>面<sup>めん</sup>蟹<sup>がま</sup>を産<sup>う</sup>む、鬼<sup>おに</sup>面<sup>めん</sup>蟹<sup>がま</sup>のよハ介<sup>かい</sup>品<sup>ひん</sup>子<sup>こ</sup>祝<sup>いわ</sup>せよ  
 これを平家<sup>へいけ</sup>蟹<sup>がま</sup>といふ、壽<sup>じゆ</sup>永<sup>えい</sup>の戦<sup>せん</sup>争<sup>そう</sup>子<sup>こ</sup>溺<sup>ひた</sup>死<sup>し</sup>の者<sup>もの</sup>の克<sup>あ</sup>竟<sup>げい</sup>の化<sup>あ</sup>  
 すといふとハ世<sup>よ</sup>ふおまねく知<sup>し</sup>らるあり、さてこの蟹<sup>がま</sup>を地<sup>ち</sup>子<sup>こ</sup>よ  
 してハ島<sup>しま</sup>村<sup>むら</sup>蟹<sup>がま</sup>も武<sup>たけ</sup>文<sup>ぶん</sup>蟹<sup>がま</sup>もといふ、文<sup>ぶん</sup>祿<sup>ろく</sup>清<sup>せい</sup>談<sup>だん</sup>子<sup>こ</sup>近<sup>きん</sup>年<sup>ねん</sup>世<sup>よ</sup>珍<sup>めづ</sup>

くあやしきとよひのむらめり、攝州尼崎の近所の川水不  
思義の蟹住りつとふ甲の面子人れ顔昭々とあつられて彫  
入たが如し、その由緒を尋ぬるよ中ごろ細川武藏入道高國  
道永天王寺の近隣より生害せられり、その家人島村輝  
正左衛門貴範とふりの高國より後れり追つて御  
行へを兄奉らんと急ぎりふこの貴範を待すて道永敵  
衆もせんゆさか一壺を敵にあやめられ遂に兄出されて  
討れりともあんこの生害を貴範聞て無念におのひあつれ  
敵を縦横無慙に追ちりひ向ふ敵二人くつらきて引よせ川  
瀬の深子とび入て敵味方三人水底に沈り、その靈化して

蟹とあつと云天王寺より尼崎へ行く道に野里川とあつ  
すふちちその川へ入るとり島村が靈あれば俗に島村蟹といふ  
とありこの事まゝ攝陽羣談書言字考あつと云えり、諸國里  
人談に攝津國尼崎兵庫の浦に蟹に甲怒れる面のごとふ  
し、甲を著たつありさるれり、これ秦武文松浦五郎がため  
海中に入て死するその靈ありと云り、まゝ東里新談介品  
もこのことありす、品物の形状あるは産所よりて、  
傳會の説あると和漢それたありて多し、

水虎

水虎俗に河太郎あつと云ふ江戸まで八川水に浴す

童をこの時よりうのうをひらきとありてあつたをき  
 どいと稀まゝそのうをとりあつたをたうきんさうのあり西  
 國の所よりてハ水邊をたて常子とありとぞ怪をた  
 も狐狸とハおのつうとありてゆくまゝをひつうをいさる島  
 茄子子一つと子齒と三四枚づのこづつけたうとありと  
 その島にゆくよりきまう仇をあすと執念とまうとありと  
 梳紫うすての仇をたれ人江戸子きまうても猶怪のありと  
 おもきまう、うのうをの馬真とて見へる背腹を子鼈の甲  
 の如きものありて手足首のやうに鼈子とよく似たり世人の  
 スッホンの年経たるものあれうとよもまうぬれり越後國蠟

崎のやうとてのこゝやあつた夏のあつた農家のこゝろ久家の  
 内におそひ居る子友たちの童きまういさ河邊子行て水も  
 して遊んといさまひ行て子あきまひ来り童の親れを  
 かくり来り家あつたの云今すうまそのこの子息の遊  
 び子来りといさまひいやとよせられハ風のそちまで今朝あり家  
 子即居りぬいあやまきとてそひあつたとそ後子まけハ  
 うその童子化てまひおつたありとすうまう上総國  
 子もある家の童をその友の童り来りて川邊子あそびん  
 とてよひ出ふきまういさこれ母のいさ川邊子行ハあり  
 あつた佛檀子そあつた飯をくひて行とひつけられ友

のほろへんあつたやだつとひつとつり進行ぬとぞこれも  
うのそつてやあん先祖まつつハ厚すんきとつとつとつ

暖酒

唐の白樂天の題仙遊寺詩に林間暖酒焼紅葉とつ句  
朗詠も載せて人のあまそつあり酒をあつめ飲めるとつ  
しありのあつりれれと今世のどつ四時とも子常にあつためた  
まハあつて近喜式内膳司の土熬焔ハ今の鍋あつ上古よ  
アその器もあれと暖酒ハ重陽宴よりあつめて用ゆるつ一條  
冬良公の御説のよ温古日録にええつ徳元の初學抄に  
扇ハ四時とも用ゆるれれと夏の季あつつ近つ酒も四

時ともあつめ飲どあつめ酒とつハ冬れ季もあつとつあり

さて酒のえん子今爛とつ字をりつる俗字あり酒をあつめ

と冷と熱との間子温とつとつとつ間を字音よぶとつとつ

とつあり俗火偏子作て爛とつとつ爛ハ字書すれハ音爛

と同一猶その例をいふ俵ハ俵散とてあつとつ今ハ米芭の

稱とつてたつとつとつ鯉ハ鮒之大者とあり今ハうをとつとつ

ハ堅魚の二合中、古ハ脯中つとつ用ひれハ堅魚の義ありとつ

の文字を同文通考子國訓とつとつ

萬葉集夫木抄

鬼貫が獨言よいありハ名所おとつ物をりつとつ句ハ古歌

あつち古事子てもたうらある證據おき句ハつけを傳はる某  
いま二十もいふところ先師松江の翁と梅華翁と列坐の  
會ふいで、

あよと見ふはちるきも遠し吉野山とらふ前句、

腰ふ少くべ此さげくからくとつけはるま吉野山子ふ

くべその故ありてまやと師のともあひぬまは當惑して先前

句とぞ句前もとなく傳あつてつづまやうあつそのあつつけよ

とひさすうやされらるるぞは幸爾のともさひ出らんと一座の人

のあつとところも面目あつて、

見すの華れさうとまぬさひくひさしたう入道ひとり行

とのふ古歌子すうてつけはるきと當座の作意をりて此歌を

うららるる昔もさへつづくはあれは何子あも歌ふうと尋られ

らるるどもたう萬葉夫木子て見せといひはれやぞ執筆子う

せられらるる云これらも萬葉夫木子世人のあも歌多きゆゑ子

老うのひて座上をあざむきうあづくと見らう、一のあもあハ

きもあもあつて母あろくおれをれらうをきこるやまも萬葉集

と夫木鈔ハ世子又存人も多うれはまやその集子あきをいひ傳へ

たうもあもあつ今そのひとり人をぞう、

樂ハハ文が不棚の下すまをこりてらあああの一と

とのふを萬葉集の歌と一あ





とや曾我兄弟此兄を十郎身を五郎といふも口けあるとぬ  
むすハ兄弟の排行正しうもたまはたまはるるれと押  
子か故あるとあり

和歌子て狐狸を伏せしと

物を伏すもハその名のなきをきりて歌子あるよりあり北條  
氏康北城中にて夏のころ狐は鳴れハ氏康のあはる歌

夏はまのぬ子あはる蟬のや衣あはる身の子きよ

くれハそのあはる日拙多く死しとありとやあはる狂歌吐し  
兄えり近く横田袋翁のあはる人の家北麻子狸の夜と子来り  
て馬をわらうりハ神佛の護符をさう祈禱まおひれ

まぬのこすれとあはるあり

心せよ谷のやまはぬきふのこあはるとそハ身も沈むあは

と一首の和歌を誦しうの鹿子あはるその夜より

狸のまきと止るとそハ歌ハ催馬樂の貫河はぬきふの

せこれやうたまはるやうふとそ詞子てあはるとや

岐神

幸神も道路衢神ともひて二神立ちあはる石像をちあは

とて江戸にも在りもあはるれど上野國ハ岐路と子あは

すありとそハ此像を世子猿田彦大神と鈿女命の二神と

ハともあはるやうのそ扶桑畧記ハ天慶二年九月



兩部 唯一

神道子兩部唯一といふ名目あり兩部とハ佛の道此密教乃  
胎藏界金剛界の兩部といふことを神の道子合せたるを兩部  
習合の神道とハつるの兩部をりて神道小合せりあり  
部の字もく意得て神と佛とをりて兩といふはあはれ、さ  
てまゝ唯一といふハ兩部神道といふものゝあはれ、きて、その兩部  
城まゝハさるよりの外、されハ神の道此唯一ハありの事か  
その名ハ兩部神道ありて此後あり、あはれ、その名を兩部子  
む、いふは、あはれ、守天人唯一の義ありといふを、さる、ま  
ひつて、さる、ま、い、と、り、

楠家菊水の紋

楠正成が家紋を菊水とするとも、くの説あり、系圖子ハ後  
醍醐天皇判官をあらせれ御らう菊の華一英を盃此中あり  
久させたまひ正成子下さき菊ハ千歳此功ありとのたまひ  
より家の紋と定と見えり、この説最信いふ、按ずる、日  
本史本傳子太平記を引て至櫻井驛以所賜菊作刀與子  
正行とある、よれハ系圖子菊華を賜ふといふ、す、あり、げ、子、き  
あゆ、ま、井出左大臣山吹を愛、直垂子水流と山吹を繡  
おせり、を、子、孫、り、て、楠、紋、と、す、菊、水、と、抄、り、ハ、あ、あ、り、  
ありといふ説もあれ、これらも、あ、あ、た、め、妄、説、あり、予、う、て、云

楠氏の家紋菊水ありて六明證ありて辨を待ず己子太平  
記の正成が首故郷子歸とる條子正成が形見子残せし菊水の  
刀とのありてあり、まゝ志貴山子傳る楠家の旗子菊水つきてあり、  
その圖集古十種子見えり、この二條子て楠家子菊水を用るその  
證とす、安齋の筆記も楠が家の紋ハ菊の華三あり、  
傍下小流水の形あり、永正七年玄雪齋の畫ハ見聞諸家紋  
との書子見えり、今も猶楠家の血統子ハ菊水を家紋  
とせり、

鳥居

神社子建る鳥居を華表子充ハ誤あり、華表ハ柱少く門子

あゝ、華表を鳥居子あてり、その小華表柱子  
鶴のこまり、丁令威が故事子よりて鳥居子あてり、ひよ  
せて附會せり、鳥居ハ神門あり、鹽尻あり、  
く、鳥居といふ、今の鳥居ハ笠木の次ハ横木の名あり、  
里雞栖と書り、正字あり、倭名類聚鈔門戸類子雞栖切韻  
云、捐、報、今之門雞栖也、辨色立成云、雞栖、  
同、と、を、こ、り、て、あ、り、證、と、す、  
東吳と銘あり、水盤  
石の水盤子東吳と銘を彫たるあり、その形俗子棹子水鉢  
よふりの如く、その銘の義あり、を詳しせず、



とあり、盾を持ち入りたる、鴻門の會は時、陣營あれば、  
事急ありとて、破るや、の明なきを、此の二事を、蒙求  
註し併あり、たれば、これより、あやまらざるべし。

虎の畫法 畫家の用意

或人云朝鮮の煙洲と云ふ人の畫る虎の繪を、吾邦の  
人の多うらると、大に異あり、虎の生る時、毛は黒くあり、朝鮮  
人の常す、そのあらし生る虎を、見る心、形勢真に逼れり、  
吾邦の人、皮を、足ての、あれ、皮毛を黄色、彩色、面は猫  
子、似るもの、多うらると、是れ、似る話あり、ある畫家の鯉魚  
を、見るを、魚商の、見せて、この鯉魚、死鯉ありと、その、眼中の

黒眼中央あり、生とき、傍より、ありと、いふこと、これのこと  
畫家は、意を用、きこを、く、たれ、ある、應擧、卧猫を畫  
と同日の談あり、韓非子、畫工犬馬難鬼魅、易と、いふこと、あり、  
實は、ころえある、べきと、いふ、土佐家、小、楠正成の像を、紺地の錦  
の直垂、黒革威の鎧、子、忍、うけ、ハ菊水の旗、お、とも、太平記の本  
文、子、あひて、誰、う、えて、楠公と、ハ、ある、も、いふ、一友人、此、畫工、ある  
方より、魏武帝の像を、たの、ま、れ、たる、子、半身、ハ、君臣圖像、子  
あり、た、と、あら、と、とも、全身の衣裳、此、制度、三國志、子、お、た、れ  
ハ、ある、より、お、く、て、い、子、忍、う、んと、地、ひ、ひ、ら、つ、ひ、子、こ、ま、れ、た、り、  
ハ、予、も、その、席、子、て、ハ、こ、ま、ハ、定、ぬ、て、文獻通考、子、あり、て、考、つ、る

ハ三國の時ハ服制を改め後漢の制度を用たりと考れたるハ  
やそそれよりそつけやうたるふくその像とものひぬときなり又  
或人の人此需子より大原の雜啗寐を名らるるその時節の  
考れたるハあらひの景物子さうつえなれはこぼくこぼらひまの  
らるるこころ予云大原の雜啗寐ハ俳書の季寄小ありて節  
分此夜のとれりそのと大原物語といふ冊子にこころ後ハ江丈  
明神の拜殿子節分の夜男女參籠して通夜するといふ今ハそ  
のとふきよりありといひればさう早梅やぬるぐんとてよろこぶ  
て之りぬ専門の業ハ用意のよくさこそありたきめのそりい

藤豆 鈴蟲松蟲

京師の人云江戸あく隠元豆といふものをとりてハ藤豆と  
りその形の形状の藤の實子似れば藤豆といふありとそと江戸子  
てハ藤華子似る豆あれを藤豆といふていづれもそのとこりあり  
接漢三才圖會子松蟲の鳴聲を知呂林古呂林といひ鈴蟲ハ  
鳴聲如振鈴里々林里々林といふとあり幽遠隨筆子知呂林と鳴  
を松蟲といふんと據おきま似るこれハその頃より流俗蟲の  
名を取ちる松蟲を鈴蟲といひ鈴蟲を松蟲といひあつハ  
たるを考へたるはこころあつ松蟲の音ハ松風の凜くと響  
あつまたえなればちんちろりと鳴ハ鈴蟲あり法師の鈴といふ  
りのをゆる音子よく似ればれり和歌も松蟲の音を松風子



たぐひつゝよめり多し為顯卿百首子

琴の音子よめり峯の秋風をあらまの蟲の聲やそららん

慈鎮和尚住吉社百首子

住あいのいづきれもの蟲の音小おのう聲ゆも松風そららん

又延喜七年亭子院の御時西河行幸せさせたまふ忠岑和歌の

序子山の端子月まつ蟲さひひてきんの音子あやまさせあつ時

ハ野へのすゞ虫をまきそ谷れ水音子あらうちれといやときんの

一息やとらふまをもち松風子よせあまの琴の音子峯の松風

よめりつゝよめりつゝあまの鈴蟲をまきそ谷の水音やとらふ

ちひらんうらふところありうれこそ證とすふ堪うとらふ

硯の面子文字くぬと

硯の面子文字をうぬわのといふと今手習あまふつね子

つゝとれり、そのふきあまのりして源氏物語子姫君御硯を

やを引よせそ手習のやう子うきおせたまふを、これ子うまた

ま硯子ハうきそりざれりして紙たてまのりこまふを、こひて

みきたまふとあり、河海抄子、石の抄子、のをもろごう

きふりの揚枝もつらふごうり、菅家硯ハ文珠の眼あり、この

故小眼石とふ此聲をうて硯石とハ書あり、云々、仍て抄本

てよめれど、うきあまの菅家の御日記子硯の面子不書

ありとらふ、抄あ、河海抄子、菅家の御歌ハ、世もひ

傳れどいと信がたり、志すれども硯子文字を書きおきし昔公の  
御遺誡ありとハ守覺法親王の右記子教童指歸抄云彼  
抄者菅三品之撰也其條云者硯不可書文字事云以著  
不用揚技事云、聖廟御遺誓之中有之云とあるをた  
うれも撰といひて書き弄華抄子折るのいさめやあつた本  
説あるをを志すぬあつたり、まゝに石の抄てそのゆゑ  
さくといふ神詠ハ聖廟御遺誓の意を後人の讀るを誣りつゝ  
たるもや、そハ仁徳天皇の故事を時平公のまゝ高き屋子  
のありて見れば烟らとらふ勢を新古今和歌集子御製と  
て載たる類もあつたり

門々

菟波集子門々やあつたりひまれくまもあつたり  
捨人子ゆりの名もあつたり 崇世法師、その連歌子門々とあつたり今の  
名札のとあつたり、門子表札をぶつて尋ねる人の志れやす  
きやうすすともあつたりと見えたり

開帳

神佛を開帳して衆人子拜さすこと、二水記子永正十四年  
四月十一日法輪院虚空藏開帳之間為參詣とあり、開帳  
といふ名もあつたりとれり、まゝ開帳ハ大々三十二年子  
たひすことゆゑあつたり、この頃より始まれり、小増鏡

瀧のりとは不動尊らのふらうハ伊豆國より生身の明王

此のゆゑに奉てきりあめさくむをりたりまふその葉笠

寶藏子こめて三十三年子一度いささくとぞうけたまはると云

下とんえさうらうれはやくあまきよりのあさうりもや唐山も似

たるとあり資治通鑑子唐憲宗元和十三年十月功德使

上言鳳翔法門寺塔有佛指骨相傳三十年一開開則

歳豊人安とあり

大田道灌の歌

小道とんと必ふんぎきあありとふらぬ

いそずいぬれまゝぬれを旅人のあとよりを野路の村雨

とぞ道灌の歌子て人口子膾炙すれどぬれまゝぬれを

よてえとりのるある日彦山權現誓助劔との浄瑠璃を

聴くも小京極内匠がおきくとえり討子する條子折のぬれ

雨ふと日和すあさう一時いそずいぬれまゝと旅人

此れとよりを野路の村雨大田道灌よく讀たつとや

きかぐらあさうとえままゝとふらまこころづきて折るぬれ

らまゝとあさうと世人のいひつとより詞とのありと折る

て慕京集を関するは勝元朝臣短慮不成功との冒黎

の作詞をと消息のちり書付てぬれらるるをを問

わらうのやどよりうせよハあやまうつえん

浅草観音堂の繪馬

浅草寺子古き繪馬あり俗子つえん此繪ハ狩野古法眼  
元信の畫ところありと云り往年この繪馬毎夜扱をえ  
おれい草を食ひうるとも、まゝ再扱江戸砂子子狩野玉  
樂ら畫あまうとあり或人の考小此等の説を誤る  
里伊勢安齋云驢黄物色と云馬此書ハ狩野主馬尚信の  
畫くところありその書此作者駿馬の骨相あまび子毛色  
を口授してあまうしむる子尚信をいめて駿馬の畫法を得  
たりとあるをいひて駿馬の額をあまうて浅草観音の堂小

懸たるその繪馬今あ存せり俗子これ馬扱をえおれて草  
を食ひてさうといふもの具ありと云う又ある人の説子この繪馬  
の録子寛永十九壬午年十二月十九日炎焼之時武州江戸  
之住木村市兵衛出之と記てあり今ハ文字もさすかりて明  
あまう按子尚信ハ慶長八年癸卯の生とて慶安二年己丑  
三月四日四十七歳少く没す寛永十九年觀音堂炎焼の時ハ  
尚信四十歳よて存命あり當時在世の人此畫あれどもこの畫  
のすまもたを賞し且俗子奇怪の語説をいひつゝ額  
おれいさす小取出たりものあまうと云うこの二説よて尚信  
が畫といふをいひてすまもたをいひて寛政元己酉年觀音堂

修復しゅうふくのそりふくの繪馬えうまをあらうく見ると、筆者ひつしやあり左さの如ごとく  
所ところ想おも筆ふでと落款らくかんあり、なれば尚信しやうしんが筆ふでと母ははをれずと  
見えたり

めづるく

今女文いまをんなぶみ子こハウあはれ終をしますめぞくうくとやをそと定さだまれりそを  
見、その頃ころよりあう書かをそとすうされどめぞたると詞ことばを消息せうしき  
はつるもハ源氏物語げんじものがたり總角そうかくの巻まきをそと見えられづるきとあは、  
うくとつふハむうの假名文なづなぶみ子こあをうこととつうくと同語どうご子こ  
て、俗文ぞくぶんの恐おそれがうをうぶぐどく男をとこの手紙てがみ子こ恐惶きようかうとらるる子こ同  
一ひと意いあり、めぞくうくとつう詞ことばハ一休いっけうむれ一ひと子こ親月おんづきとて都みやこの

町まち子こ松まつまうと注連繩しるしづなくううとて祝いわあをううう、され頭くまのまきあり  
きたまるとと或人あるひとの足あしてこつうむとやられハ返かへしとふ、

あひあきこのされ頭くまあをうとあぞくうやとこれありあはし  
とあり、この歌うた平たいく一休いっけう和尚おしょうの詠えいあふこの詞ことばれをき證あかしとすべ  
し、

茶ちや背せ

俗言ぞくごの轉訛てんぎハこころうとそそのまうよ唱となへ來きと多おほイ口取くちの菓子かし  
を茶ちや背せけといふハ茶ちやふけの訛あやまりあり、甘あまいのをそひて後のち茶ちやを飲のみ、  
その味あじとよあう、なまハ茶ちやのこけし食くもの名なあり、能のうの狂言きやうげん  
の詞ことばハ茶ちやふけといふハ帶隨筆おびぞりふで子こ茶ちやふけれ口くちをきよめるといふ

もつえんくう、壁ゆりの年傳をさうくうとのふ指鳥子て鳥をす  
 す容子似えのありさ、いそりもくとのふ八重言ありまて庵丁  
 刀を庵丁といひ鬘斗蛇をのりとのいひも畧言あり、ふくも  
 杉原紙を杉原とちうといひくとも海人藻芥康富記ももつえん  
 とう常子田樂嶋焼たれもつくとあれと正しく、豆齋の田樂  
 茄子の嶋焼といふ手あり、鷹かき蒲焼も子同一例子て畧  
 言のあつひあれて人この意を得るとあり

俳諧百韻の始

おろ伊勢の守武山崎宗鑑俳諧を弄てあり玄上日法印  
 貞徳翁子至て下只十句二十句ののひ捨子く定まると會

帝もあうくく寛永六年十月下旬貞徳翁の門人西武と  
 くのの京都寺町妙満寺子捨く初めて會席をまひり連致  
 の式子あひひ床に聖像をくけ香華を供り文甚まるとまくと  
 百韻満尾すこれ俳諧會席の濫觴あり其面八句  
 つく綿うぬり桶ありれ庭の雪  
 ひ火をもちめされよ雪の衣手  
 てんや寒をさくくぬぬらん  
 満水清きまの乃岩がね  
 いづくも泊さめぬ挽師船  
 月ごぞくか山の方角

松永 貞徳  
 山本 西武  
 野口 親重  
 妙満寺 日如  
 赤吉 道節  
 本正寺 日能



どしどしとてそめりや及びの唄ハ淨瑠璃長歌の所作とてうらぐて  
俳優のあつちより長も短もさへハの半抑ひのめりやすの大小  
とあつちのあつちよりあつちいふ意にて名づけたりとていふもぞ

や、

木牛

一友人の兵家云孔明木牛流馬を實木木を造れる牛馬の自  
あつちとて抑ひのびぐとあり明の俞龍徳が兵衛とて書孔子  
明が木牛ハ獨輪車の別名とあり抑ひ兩輪あつちハ間道小徑の  
運送しめられハ獨輪此車にて人力を助るゝ為ありそのと  
まれ時測まざるやハ四脚あれハ木牛ハ名づけたるあつちと

いり古人の名をおもひてその形と用とふよりて名づく

と多し樂府子客從遠方來遺我雙鯉魚とあり書翰と

とれり丹鉛録子古人尺素結為鯉魚之形即紙也と

つら蘆葉達磨の圖も吳志子伐葦蘆以為泅爾雅小度

人乗泅註子小筏曰泅とありまて詩子一葦抗之とありあつち

葦蘆の舟材ありとあり訛る子あつちぬくといふ説もあり葦唇

抑眼まて酒池肉林ありハ霞のころも雨れあり州木も臚

丑ころ時をいふもこころ形容の言あり文字と詞の拘泥

してあやまり解すべし

三國一の醜

まんぐいち あまがひ



韻會子セツモンテフ説文云醴レイハチニ一宿熟也又醴甜酒也ニユナリとあり甜酒ハお  
 まさけありシラカク一宿子熟すれハ一夜酒ヒトヨニハシラカクもつりカミチ按子神代卷子  
 木華開耶カウヤヒタ姫子スメミ皇孫幸之則一夜有身カミチとの醸天甜酒嘗  
 之とのふとんをさうふーのんじやさて富士神社ハ祭神木華開耶カウヤヒタ姫あれ  
 ハ一夜子ヒトヨニ娘ぬとのふをヒトヨニ一宿醴ヒトヨニ子よそへ三國一ヒトヨニまゝある雪ゆきをさう  
 富士山子ふーさんちあみある名ナをつけ久このナキ木華ハ梅うめをハやぐて梅鉢うめばち  
 の紋カシをもつるれり、これ醴カシさうんせ子カシを考カシる三國一カシある  
 雪醴カシとある梅うめむちとよびて賣ウありくの録カシあり、

三養雜記卷三

